私のかかわってきたものづくり

津田ひろ子

花王(株)スキンケア研究所
[131-8501] 東京都墨田区文花2-1-3
嘱託社員（シニアパートナー）

はじめまして、花王スキンケア研究所の津田ひろ子と申します。私は男女雇用機会均等法元年の1985年に花王に入社し、2022年に退職、現在はシニアパートナーという位置づけで働いています。今回、同じ研究室の高分子学会委員の方から、本コラム執筆の依頼を受けました。私には専門と言えるような研究分野はなく、会社生活の大半をメイク落としの製剤化技術・処方開発を通じてノニオン性界面活性剤・油・水の世界に親しんできました。本稿では、思い出に残る仕事について書いてみようと思います。

若かりし頃、私は上長から「われわれの作る技術や商品は、人々の習慣を変え、やがてはその国の文化をつくる、そんな可能性をもっているんだ」と教えられてきました。今思えば、まことに神々しい言葉だと思います。そして、実際に、体を洗うものは石鹸からボディーシャンプーに、メイクアップ（以後メイク）を落とすためにはメイク専用の洗浄剤、すなわちメイク落としが使われるようになるなど、日本の洗浄習慣は先人たちの努力の結晶によって変化してきました。

あまりにも多くの商品が出揃った現在では、そんな画期的な商品がでることはめったにありませんが、ささやかながら私にも関与できたかもと思える仕事がありました。それは「お風呂場でぬれた手を気にせず」メイクを落とせるクレンジングオイルの開発です。

花王がお風呂で、ぬれた手でも使えるクレンジングオイルを上梓したのは今から20年ほど前の2003年のことでした。今でも女性の落としにくいメイクは、クレンジングオイルで落とすのが最適ですが、当時の製剤は洗浄成分である油剤に洗い流すための乳化剤を混ぜたものであって、乾いた手で使うことを前提としていました。なぜなら、水の混入により、油剤が直ちに乳化され洗浄力が著しく低下するからです。そして、そのことは消費者にも広く認識されていました。

ぬれた手で使えるオイル製剤には、界面活性剤を利用して、油剤の中に混入してきた水を溶かし込む可溶化という現象を利用しています。したがってベースにある考え方は一般的な界面化学で説明できるものですが、びしょびしょの手で使ったときの水の混入量は、オイルの使用量に対して、1：1程度の量に上ります。自身と等量の水分量を可溶化してなお、クレンジングオイルとしての性能（油相連続）を保つ処方の開発には、試行錯誤と多大な努力が必要でした。

製品を開発しているとき、私はこんな単純な発想を他社はなぜやろうとしないのか、世の中はこんなものを求めているわけではないのではないかと不安になることがありました。しかしながら、上梓された商品はオイルタイプとして市場最後発であったにもかかわらず、一躍トップシェアを獲得し、愛されて今日に至っています。

お客様に愛される価値はなんだったのかをいま思い返してみると、それは水が混ざっても洗浄力が落ちない基本性能の実現により、手のぬれを「気にせず使える」という点にあると思います。すなわち、洗面台で周りをびしょびしょにしながらメイクを洗い落とすより、お風呂で気兼ねなく落としたい。でもクレンジングオイルは水が混ざると濁って落ちなくなるため、手肌をぬらさないよう気を付けて使っていた実態があったのです。

こういったことは、ユーザーの意識とプロセスに自然と組み込まれているものですから、不満の声としては上がってきません。ぬれた手を気にせず使えるクレンジングオイルはそんな声にならない不充足を解消するものであって、こんなものが欲しかった！とまさにかゆいところに手が届く利便性を提供できたのだと考えます。

退職してシニアパートナーとして働く今、自分はもう会社にいても役に立たない人間なのではないかと考えることがよくあります。なぜならインターネットやスマホでかなりのことを済ませてしまう若い人々の価値観、購買行動について、キャッチアップできるわけもなく、また、ものづくりに関してまじめな議論をしているだけでは、商品を手に取ってもらえない現実があるように思うからです。

一方で、われわれが開発している技術や商品は、元来人の役にたつもの、そして生活を良くしていくものでなければなりません。価値が見えにくい中で、その本質をゆるがせないためにも、若い人たちに伝えなければならないことはたくさんあるはずと自分を励ます日々です。

 ©2024 The Society of Polymer Science, Japan